

1. 優しさの具体化

病院は、デザインの良し悪しで印象が変わる。病院で不安を感じたり、押しつぶされそうな気持ちになった経験は誰にでもあるにちがいない。それは、病気に対する不安だけでなく、病院そのものが持つ「怖さ」にも原因がある。患者に優しい病院は、お医者さんや看護師さんだけではできない。優しい気持ちを目に見える形にしなければならない。九州大学病院第二期棟のデザインに取り組んだ経験から、患者に優しい病院をつくるための方法を解説する。

1) 組織対応

日本の病院は、機能的で合理的で清潔にできている。しかし、デザインの面から見るとものたりない点がいくつかある。それは、患者に対する配慮の不足と、トータルデザインの不足である。

これからの病院は、患者に対する優しさをもっと前面に出し、あたたかく信頼感が増す病院にしたい。九州大学病院は三期に分けて建設されつつあり、今回担当した第二期棟には、小児医療センターが含まれている。子どもたちの不安をどうしたら軽減できるのかが、大きな課題であった。

これまで、患者に優しい病院づくりという単純な目標がなかなか実現できなかった。それは、施主側と建築設計側の双方に責任がある。病院は、院長や理事長が中心になって計画し、設計者はそれを忠実にトレースし、なかなか意見を言うことができない。病院は特殊な空間である。多様なノウハウが必要である。しかし、それが手帳となり、デザインの可能性を制限していた。また、施主の偏った知識や好み、さらには専門職集団であるところから来る自負や、縦割り横割りの複雑な組織によって、体系的なデザインが成立しにくい現実があった。

九州大学病院では、芸術工学の分野を有していることと、水田祥代病院長のリーダーシップによって、何層にもあったハードルを越えることができた。また、水田病院長の下に病院関係者と設計各分野の専

門家による即断即決型のワーキンググループを編成した。

また、計画・設計をする者が限られた分野だけであると、配慮が行き届かないところが出てくる。病院を魅力的にするためには、多様な知見をが必要である。一方で、そのばらばらな分野を統括して目標に向かわせる明快なコンセプトが必要である。

2). 権威から思いやりへ

さまざまな情報が飛び交う現代においては、医療関係者や病院は、病気に立ち向かうだけでなく、患者との好ましい関係の構築へと意識を変えていかなければならない。医療関係者は、権威的であるよりも慈愛的であってほしい。医療環境は、機能的であるだけでなく快適であってほしい。患者とのコミュニケーションは、一方的な関係ではなく心の動きを思いやるものであってほしい。

3) 心理的な支援

病院のパンフレットや薬袋等で美しいものを見たことがない。お年寄りや視覚障害者にも見やすい印刷物を考えたり、信頼性や新しい取り組みをアピールするなど、デザインの力で解決しなければならないことがたくさんある。

患者の心身の病いに対処し、病院の空間、情報、医療関係者が総合的にサポートする体制を築くことが肝要である。

4) 快適な生活の場へ

すばやく的確に患者を処置することと、設備や治療技術を向上させることが病院にとって一義的な課題であるが、病気を治すために、殺風景な病院でもがまんするという精神主義は、そろそろ改善しなければならない。病気を治したいことはもちろんだが、同時に、入院しても文化的な生活を送りたいとも思うことは自然な欲求であり、図書館やギャラリーや専門店や教会など、基本的な生活の質を維持できるようにする配慮が必要である。効率だけでなく、豊かな空間にするように心がけなければならない。